

# とうべつ 歴史余話

## 第4回：当別石狩間の道路の歴史

まちの歴史に関する連載の第4回は、当別石狩間の道路についてです。

現在の主要道路といえば、国道275号、国道337号をイメージしますが、開拓当時の道路状況はどうだったのでしょうか。まちの発展に欠かせない道路の歴史から、まちの開拓の歴史を取り上げます。今回は、数ある道路の中から、開拓初期に聚富（現在の石狩市厚田区）からの入植に必要不可欠であった当別石狩間の、石狩道路と呼ばれていた道路を取り上げます。

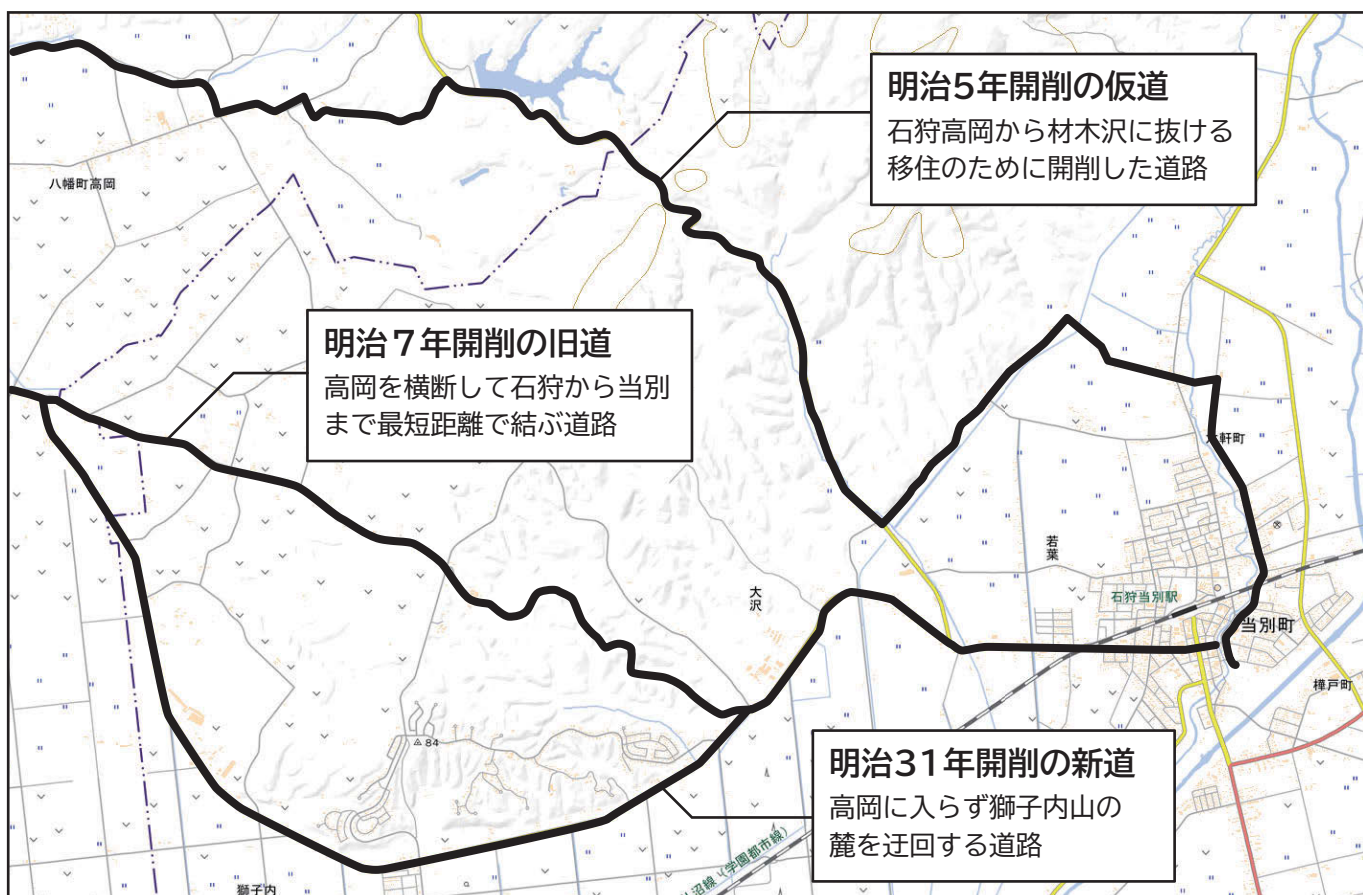
明治5年に聚富—（シラツカリ川沿い）高岡—上当別（材木沢）—田の沢—六軒町—西小川通り市街地の

仮道が開削されましたが、高岡の丘陵地帯に急坂溪谷、湿地泥炭地、森林地帯が重なり、駄馬での交通に難がある状態でした。

そこで、明治7年に石狩新道（高岡—石狩）を開削し、4km短縮されましたが、融雪期や雨期になると交通不能になること、移民の増加に伴い交通量が増大したことから再度路線の調査が進められました。

利便性、修理の負担等が検討され、明治31年に高岡を迂回して獅子内を通過し、石狩へ至る現在の道道岩見沢石狩線の前進として整備され、その後、道路の拡幅、舗装等の道路改良が進められ、現在へ繋がっています。

### ■当別石狩間の道路の変遷



■問合せ 総務課総務係 (☎ 23 - 2330)